
俺達の複雑すぎる恋愛事情!??

からあげFly

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺達の複雑すぎる恋愛事情！??

【Nコード】

N8908S

【作者名】

からあげFly

【あらすじ】

朝起きたら何故か突然、見慣れた無難な顔した男から金髪に黒い瞳を持つ可憐な美少女へと性別が変わってしまった月城霞はこの奇怪な事件の犯人にして昔からの親友達のせいで暫くの間、女性としての生活を余儀なくされる。

悪いことをしたお詫びにと周囲の人間達に積極的に協力を煽る霞の親友達だったが……。

『流れ行く思い出』（前書き）

どうも、初めまして作者の『からあげF1Y』と申します。
皆さん、これからどうぞ宜しくお願いします^^

『流れ行く思い出』

幼い頃から、俺こと月城霞つきしろ かすみはずっと周囲に言われ続けていた言葉がある。

それは『お前が女の子として生まれてくれれば良かったのに……』
という言葉だ。

周囲の声曰く、俺という人間を一言で言い表せば【家庭的で気が配りが上手く、何処か母性的を感じる】……人間らしい。

「おい、かすみ。お前何で黒いランドセルからってんだよ……
…女は赤いランドセルだろお」

親から貰った名前も“霞”というどこか女の子みたいな名前のお陰で小学校の頃は良く同じクラスの悪ガキ共に要らぬちよっかいを掛けられる事も多々あった。

『おい、お前！強……弱い者イジメは止める……！』

そんな時、いつもいつも俺を助けてくれる3人の友人達がいた。

「霞、もう止める。相手泣いてるから……鼻から血い出してるから……」

コイツらは決まって俺が（護身術でケンカを吹っ掛けてきた相手にトラウマを植え付け……………）“ピンチに陥った”際に助けてくれた。

そんな3人と俺は小学校、中学校、と同じ時間を共に過ごしてきた。

そんな俺達は今までくだらない事でケンカしたり、皆で無意味な馬鹿やったり、実らない恋愛話に花を咲かせたりしてきたけど。

高校に入学して、卒業して、就職して、結婚して、離ればなれになっても…………俺達は今までもこれからもずっとずっと親友で居られると信じて疑わなかった。

でも…………。

高校生活2年目の桜咲く季節のある朝、俺達の友情が思わぬ事態に揺らぐ事になることは、この時、誰一人として知る由も無かった…………。

『流れ行く思い出』（後書き）

とりあえず簡潔なプロローグとなりましたがこれからキチンと更新していきますので宜しくお願いします。

PS・ご意見・ご感想は随時募集中です

mission1 『現実を認識せよ!』 (前書き)

更新しました。

少々、ギャグ的な要素も入っている内容になっていますが、そこはあしからず……。

mission 1 『現実を認識せよ!』

～早朝・霞の部屋～

朝早くから遠くでチュンチュンと雀の鳴く音がガラス越しに聞こえてくる……。

「ふあああ……あつ……もう朝か……」

眠り眼を右手で軽く擦り、首を軽く左右に振って首の骨をボキボキと鳴らすと例によって俺ごと月城霞はベッドからゆっくりと起き上がった。

「……何か昨日は妙に懐かしい夢を見ていた様な気がする……」

そんな事を思い出しながら俺は窓際に立つとカーテンを左右に移動させると朝独特の何処かひんやりとした空気とポカポカとした陽気な雰囲気醸し出している太陽が輝いていた。

西暦2018年4月12日……世界は10年以上前から大して技術的な進歩もなく、未だに日本も無能な政治家の掲げた馬鹿げた法案や制度を無意味に繰り返していた。

「……以上、お天気コーナーでした」

折角、珍しく休日の早朝から早起きが出来たので、とりあえず無駄に二度寝だけはすまいと、さりげなく近くにあったTVのリモコ

ンに手を伸ばしチャンネルを変えるとニコニコ顔のお天気お姉さんが今まさに天気予報を終えた所だった。

「…………チツ。」

天気予報を見るタイミングを微妙に逃してしまった俺は僅かに苛立ちながら昨日の夜から事前に充電していた自分の携帯を使って今日の天気を確認した。

「…………おつ、今日は1日中晴れか」

「今日のアンラッキーな星座は天秤座の貴方!?!」

不意に携帯で今日の天気予報をチェックしていた俺の耳に朝のTVではお馴染みの“今日の占いのコーナー”の結果が聞こえた。

普通ならガン無視といく所だが天秤座は…………俺の産まれた月の星座だ。

どういう不幸に見舞われるのか…………何にせよたかが占いだと半信半疑な気持ちで俺はTVに視線を移した。

『昨日の情事が全ての不幸の原因です。不幸は長く続き、先が見えません…………困った事があつたら迷わず親しい友人に相談しましょう。 “ラッキーカラーは黒”…………ただし下着限定ですので勇気を出して身につけよう』

(…………何だ?この意味不明な助言は…………下着限定のラッキーカラーって、この占って女性限定?)

しかも昨日の情事って……生まれてこのかた未だに【童貞】を貫いている俺にはまず関わりの無い内容だ。

そんな虚しいにも程がある事を考えながら俺は気分を一新しようと顔を洗いに洗面所へと向かった。

そして、洗面所に到着した俺がさりげなく洗面所にある鏡に視線を移すと……。

『……はい？』

そこにはいつもの見慣れた顔の面影は無く、何故か金髪で黒い瞳をした美少女が映し出されていた。

（ああ……俺は夢を見ているのか……）

自分の思わぬ姿を見た俺はとりあえずコレはまだ自分は夢の中に居るのだと断定し、洗面所にある蛇口の水を開き両手で水を掬い上げると自分の顔に水をぶつける様に顔を洗った。

……冷たい。

夢ならばこういった感覚は無いものだと聞いた事がある俺はこの異常事態に焦りを感じ始めた。

ガンツ！ガンツ！！ガンツ！！！！

（これは夢、これは夢、これは夢）

次いで俺は洗面所の壁に額を数度打ち付けて痛みによる夢からの脱却を図った。

しかし……壁に打ち付けた頭はそれに比例する様に痛かった。

そうして改めて洗面所の鏡に顔を向けると、そこには水で顔が濡れ額が赤くなっている先ほどの金髪黒瞳の美少女の姿があった。

「そんな……そんな馬鹿なあ！？」

プルプルと声を荒げながら俺はようやく自分の身体の異変を受け入れ、思いつき叫び声を挙げた。

何故なら今まで気づかないフリをしていたが変わってしまったのは何も顔つきだけではなかったからだ。

胸にはふくよかな双乳が俺の動きに反発してプヨプヨと揺れ動き、昨日の晩まで俺の股間に内臓されていた筈の自慢のアームストロング砲は何処かへと撤去されていた。

しかも先ほど叫んで気付いたが、俺の声も女性独特のソプラノ調

になっている。

「何コレ、どうなってんの！ドッキリ？宇宙人の肉体改造？それとも水を被ると女になっちゃうふざけた体質ううう！！」

どうしてこうなったのか原因も分からず、現実すらまともに受け入れられなかった俺はパニックに陥り、奇声を挙げながらひたすらバタバタと自室を動き回った。

ドンドンドンッ！！！！

「おゝい霞い……朝っぱらから騒がしいけど何かあったのか？」

バタバタと無駄に動き回っていたその時、隣の部屋の住人であり、昔からの友人の一人が異変を感じ取ったのか心配して駆け付けてきた。

（あの声は大輔か……まずい、こんな姿を見られたら事だぞ……）

しかしその時、俺の脳裏に先程のふざけた内容の占いの結果が頭を過った。

（確かあの占い、困った事があつたら親しい友人に相談しましよ
う……って言ってたけど……）

アイツらを信用して今、俺の身に起こっている事を全て話して元の姿に戻る為に協力してもらうか……あるいはこのままこの部屋に閉じ籠って身体が元に戻るのをひたすら待ち続けるか……。

一瞬の間の内に迷いに迷った結果、俺は意を決し、部屋のドアの

前に移動すると鼻を掴まんでドアの向こう側にいる友人に話し掛けた。

「大輔……悪いんだが、翔一達をココに呼んできてくれないか？」

「今からか？別に構わないけど……何かお前、声のトーンがおかしくないか？」

何気に鋭い指摘をしてくる友人に俺は冷や汗をかいた。

「その事についても詳しくお前達に話すから……とにかく翔一達を集めてきてくれ」

「……？良く分かんねえけど分かった」

そう言っただけ友人は小首を傾げながら一旦、俺の部屋の前から姿を消した。

その様子をドアの覗き穴から確認した俺はすぐさまドアのロックを解除すると部屋を移動してベッドの上で毛布にくるまり、全身を隠した。

……これは一つの賭けだった。

俺は昔からの友人であるアイツらに現在、俺の身に起こったこの異常事態を知って貰い協力を仰ぐ道を選んだ。

アイツ等なら必ず助けてくれる……そう信じながらアイツ等が俺の部屋に集まるまでの間、俺は悪い意味で高鳴る胸の鼓動に抗い続けた……。

mission 1 『現実を認識せよ!』 (後書き)

いかがでしたでしょうか？

今回は少々、長めに書いてみましたが基本的には更新が滞らないペースで執筆していく予定ですので文字数にも話数によっては差が出るかもしれませんがその所はご了承下さい^^;

PS・ご意見・ご感想は随時募集中です

mission2 『親友を説得せよ!』 (前書き)

とりあえず改めて自分の作品を見てみると話数の割りに字数が少な
かったので少々、修正と追加を加えてみました。

mission 2 『親友を説得せよ!』

ドンドンドンッ!

あれから約10分後、俺の部屋のドアを再びノックする音が静かな俺の部屋に響き渡った。

「……鍵は空いてるから入ってきてくれ……」

鼻を摘まんだ状態でおざなりにそう言った俺は先ほどからくるまっつている毛布の端をギュッと掴んだ。

「お〜い……ってなんで部屋の中、こんなに暗くしてんだよ」

ガチャリとドアノブが回る音と共にいつも聞き慣れた声と複数の足音が薄暗い俺の部屋と耳に入ってきた。

その様子を俺は毛布にくるまった状態で目と鼻だけを露出させて俺の部屋に入ってきた相手の顔を確認する。

まず最初に入ってきたのは特徴的なボサボサの黒髪に眼鏡を掛けた男で、常に学生服に白衣を身に纏っている変り種すいしゅだが一応“IQ 180の天才児”という肩書きを持っている須藤大輔だいすけだった。

天才というのは大抵、神経質で周囲とは確執を生みやすいというポジションだが、基本的にコイツの性格は“多少、頭の良い馬鹿”というモノになっているので交友関係は良好。

しかし、タチが悪い事に天才故に様々な技術や特許を持っているせいか、俺達が現在通っている高校、草薙学園くさひがくえんでは無駄に大きな権力を持っている。(大抵が馬鹿な要求ばかりしている)

「おいおい、お前が朝っぱらから俺達を呼び出すなんて珍しい事もあるもんだなカスミ……」

次に入ってきたのは長身でスー　ーサイヤ人の様にはね上がった金髪と淡く青い瞳をした俳優ばりの容姿をしたこのイケメンの名前は“リック・ダグラス”……。

リックは日本育ちのアメリカ人で普段は冷静沈着だが実はメンバーの中で一番熱くなりやすいタイプで趣味は“萌え系アニメ”と何とも残念な男だ。

ついでにリックの実家はアメリカで5本の指に入るダグラス家という有名な資産家の孫で超お金持ちときている。(仕送りの大半はゲームに消えている)

「緊急事態だと聞いて来たんですが……私達に一体、何の用なのですか？」

そして最後に丁寧語で喋り、長髪の黒髪に眼鏡をしたキリツとした眼をした真面目そうな男の名は相模宗一郎さがみ そういちろう。

草薙学園の生徒会副会長であり、その肩書き通りの堅物で真面目な男。

趣味は読書で特技は剣道と、俺達のメンバーの中で最も物事に対する頭の回転が早い。

大輔、リック、宗一郎……代わり映えない信頼出来るこの三人の姿を見て、俺はホッと胸を撫で下ろした。

「マジで頼む、俺を助けてくれ……」

そして、俺は三人との友情を信じて今までくるまっていた自ら毛布を剥ぎ取った。

その瞬間、三人が上記の様にポカーンとした顔つきになり、一瞬とも一時間とも取れるほどの長い沈黙が続いた。

それはそうだろう……友人に緊急事態だと呼び出されその友人の部屋に入ったら見知らぬ金髪美少女(自分で言うのも何だが)が友人のベッドの上で毛布に包まった状態でポツリと座って居たのだから……。

「え〜っと、あの……貴女はどちら様ですか……？」

この異様な状況にまず最初に反応したのは真面目で堅物な宗一郎だった。

大輔とリックの二人はポカーンと口を開いたまま微動だにしていな

い。「……いきなりで信じては貰えないと思うが……俺は月城霞だ」

ひっそりと静寂に包まれた部屋に静かに流れる俺のソプラノ調の美声。

そして、再び俺の部屋は静寂に包まれた。

……しかし……。

『『『はあああああつ!?!?』』』』

次の瞬間、静寂は打ち消され、代わりに大輔達の驚愕の音が俺の部屋に怒号の様に響き渡った……。

それから約20分後、俺は死んだ魚の様な目をした大輔に事のあらましを全て吐き出した。

「……つまりに話を一口に纏めると、どういつ訳か朝起きたら何故か霞さんの身体が女性のモノになっていた……と?」

そう言いながら宗一郎は半ば信じられない様な顔つきで俺に視線を移した。

「……………そうだとしか言えない」

俺の話を一通り聞いた3人の冷ややかな視線に対して、俺は肩を落としながらそう呟くしかなかった。

(そうだよな……………いくら親友と言ったってこんなふざけた話、誰も信じてくれる訳ないよな……………)

しかし。

「……………ま、まさか成功するとは……………」

大輔が自分の眉をピクピクと動かしながら冷や汗を垂らしながら女性化した俺の顔を見つめていた。

「まさか大輔さん、貴方……………」

「……………本当にやりやがったのか？」

それに加えて、宗一郎とリックは大輔と俺の顔の交互をキョロキョロと見返していた。

「……………どういう事だ？」

イマイチ、事態を把握出来ない俺は悲しみに満ちた顔を僅かに上に傾かせ、大輔の顔を見つめた。

くそれから10分後く

「……つ、つまりお前に昨晚飲ませたジュースの中には俺が製造した特別仕様のナノマシーンが入っていて、それが人体の構成を任意に変更する事が出来る“女体化薬”としての役割をしていた訳です……」

あれから10分後、俺の部屋が猟奇殺人の現場に成り果てるまで大輔を殴り付けた俺はこうなった原因を大輔の口から直接、聞いていた。

「お、俺と宗一郎は大輔が前にそんなバカげた薬を作っている……
……と言う話を聞いた事があったんだが……」

「……まさか、本当に作っていた上に実用段階まで完成していたなんて夢にも思わなかったんですよ」

俺の鬼の形相によつて恐怖に震える3人の話を纏めれば、大輔は以前から面白半分で“女体化薬”という怪しい薬を製造したらしい……。

リックと宗一郎は偶然ながらに女体化薬の話を知りつけたらしいが完成する筈がないと思っていたらしく、互いに話題として挙げようとしなかった。

そして昨日、面白半分で製造していた女体化薬が実用段階にまで漕ぎ着ける事に成功したが大輔本人も成功する筈が無いと思ひ、廃棄処分する意味も含めてその薬をジュースに混ぜて女体化薬の話を

何も知らない俺に飲ませた……という内容だった。

「俺の身体を元に戻す薬はちゃんとあるんだろうな？」

事の真実を知った俺はこめかみを軽く押さえながらこの騒ぎの元凶である大輔の顔をキツク睨み付けた。

「大丈夫だって 元に戻す薬はちゃんと用意してある……ただ、薬の性質上、女性化薬の効果が安定するまでの一定期間の間は飲んでも効果が無いんだよね……」

苦笑いしながらそう言つて大輔に俺は元に戻る事に安堵した気持ちと苦笑いする大輔の顔に一抹の不安を同時に抱いた。

「俺が飲まされた女性化薬が安定する一定期間は？」

内心、ドキドキしながら薬が安定するまでの期間を大輔に聞いた
「だした……すると……」。

「 丸一年 」

これ以上ない程に素敵な笑顔で最悪の言葉を発した大輔に俺は次の瞬間、何の躊躇いも無く大輔の両目に人差し指と中指を射し込んだ。

「ぎゃあああああああ！！！！」

「一年！一年って、どうするんだよ！一年もの間、どうやって生きていけっというんだよ！」

抉られた目玉を抑えながら転がり回る大輔を他所に、俺はすっかりパニックになり叫び声をあげた。

「落ち着けカスミ……パニックの気持ちも分からんではないが、今はそんな事よりも行動しよう……俺達も力を貸すから安心しろ」

リックはパニックの俺にそう言うと男だった時より若干、背が小さくなっている俺の頭に手を置くと優しく撫で始めた。

「……一年か、今年の一年は長く果てしない道のりになりそうだな……」

リックに頭を撫でられたのがおかげで一応は落ち着きを取り戻した俺はこれから起こる波乱万丈な一年を憂鬱な表情を浮かべながら小さくそう呟いた。

mission2 『親友を説得せよ!』 (後書き)

P S ・ご意見・ご感想は随時募集中です

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8908s/>

俺達の複雑すぎる恋愛事情!??

2011年10月9日21時35分発行